

阿英著『晚清小説史』と晚清小説の時期区分

中 島 利 郎

Distinction of the Period between Ayin (阿英)“Wanqing-xiao shuoshi”(晚清小説史) or a History of the Novels in the Late Era of Qing (清) and the Novels of that Era.

Toshio Nakajima

Summary

There still is a dispute among scholars of Chinese Literature about the beginning of the modern period. Even the exact beginning of "Wanqing-Xiaoshuo" (晚清小説) is not clear yet. In this paper the author tries to study Ayin' (阿英)'s point of view about the periodical division concerning "Wanqing-Xiaoshuo" by analyzing "Wanqing-Xiaoshuo-shi" (『晚清小説史』) written by Ayin, which is its definitive classical criticism and the only study of the category until recent times.

Received May 31. 1990

Key words : Wanqing-xiao shuo (晚清小説)

—

1980年代に入って中国の近現代文学研究者の間では、近代文学史上における「分期」が問題になった。つまり、「近代文学」という概念に包容される時期が、中国においてはいつに始まり、いつに終るかという文学史上の区分について様々な意見がかわされるようになったのである。

従来中国文学史では1840年の鴉片戦争より1919年の五四運動までを「近代」とし⁽¹⁾、次いで1949年中華人民共和国成立までを「現代」、それ以降現在までを「当代」とする「三分法」が定着し、現在に至るまで自明の理のように通行して来た。しかし、1982年10月に河南省開

封市で開催された中国近代文学全国学術討論会においては、そのような既成の「三分法」への反省からか、「近代文学」の「分期」について以下のような二つの新たな見解が出たといわれる⁽²⁾。

- (1) 近代文学史の上限を鴉片戦争よりも一步遡って龔自珍や李汝珍の活躍した道光年間（1821年道光元年）とし、下限を1929年の梁啓超の没年までとする。但し、1919年の五四運動より1929年までは「近代」と「現代」の交叉期とする。
- (2) 従来、「近代」「現代」と分化されていた文学史の区分を、鴉片戦争より中華人民共和国成立までの百十年間を合わせて、「中国近百年文学史」あるいは「近代文学史」と統称する。その理由は、この百十年間、中国は一貫して半封建半植民地化されていたこと、また、五四文学革命期に出た新文学建設のスローガンは、既にそれ以前の80年間に基本的に生れていたこと等で、故に、五四運動を界に新旧兩時代に文学史を分断するのは不合理である⁽³⁾。

更にまた、この学術討論会では、近代文学期それ自体の「分期」について、以下のような六種の意見が出たという。

- (1) 鴉片戦争与太平天国前後の文学；戊戌变法与辛亥革命前後の文学
- (2) 資産階級啓蒙時期的文学（1840—1894）；資産階級改良主義時期的文学（1894—1905）；資産階級革命民主主義時期的文学（1905—1919）
- (3) 鴉片戦争到太平天国革命時期的文学（1894—1873）；資産階級改良主義時期的文学（1873—1905）；資産階級民主主義革命時期的文学（1905—1919）
- (4) 太平天国革命時期的文学；義和団運動時期的文学；辛亥革命時期的文学
- (5) 資産階級啓蒙時期的文学（1840—1894）；資産階級改良主義時期的文学（1894—1905）；辛亥革命以前の文学（1905—1911）；辛亥革命以後の文学（1911—1919）
- (6) 鴉片戦争和太平天国革命時期的文学（1821—1861）；改良派变法和同盟会革命闘争時期的文学（1862—1908）；辛亥革命時期的文学（1909—1919）；五四運動時期的文学（1919—1929）

以上をみると既成の区分も含め確かに多様な見解が出たといえようが、しかし、近代文学史の「分期」にせよ、近代文学自体の「分期」にせよ、結局は歴史のおよび思想史的な区分をもって近代文学史の「分期」に当てたというだけのもので、やはり従来の「三分法」文学史の観点と基本的にはそれほど隔たりがなく、結局中国における近代文学史とは、歴史や思想史の下位に甘んじるものとの印象を受けるである。

たとえば、近代文学史の起点を概ね鴉片戦争に置くが、いったいこの時期にどのような作品があったのだろうか、近代文学と呼ぶに相応しい作品があったのか。いま、鴉片戦争期の文学作品を集大成した阿英編『鴉片戦争文学集』（1957.2古籍出版社、のち中華書局）をみると、この千頁に及ぶ作品資料集中のどこに近代文学と呼ぶのにふさわしい作品があるのか、はなはだ疑問が残る。確かに英国に対する反抗や阿片の害毒を描いた作品はあるが、詩

歌、戯曲、散文のいずれの形式、内容、精神をみても、それがまさしく近代文学であるといきれる作品は皆無といってよい。小説に至っては、阿英自身この資料集の冒頭で「わたしたちは比較的早期に鴉片戦争を反映した小説を、現在に至るまでまだ発見できないでいる」と述べているように、その当時に発表された作品はなく、そこに収録されている小説類も、鴉片戦争を題材にしているものの、すべて光緒二十一年（1895）以降に発表された作品ばかりなのである。従って、文学史的近代の起点を鴉片戦争期に求める必要はないといってよいだろう。つまり、人民共和国成立後に確立した思想史的区分や歴史的区分に文学史的区分を合致させることは、かえって中国における近代文学の本質を見誤ることにもなる。この事は、太平天国運動についても同様である。

中国の開明的な知識人が西欧に対する敗北意識の中で、自国の文化と伝統に懐疑を抱き、本格的に西欧に眼を向けようとしたのは1894年の日清戦争（甲午中日戦争）以後のことである。それまでは、外国の侵略に対する抵抗や反発はあったものの、自国の文化や伝統に対する反省をもった知識人は少なかった。

二

さて、この二三年來、中国の近代以降の文学をまったく新たな観点から見直そうという動きが現れた。北京大学に所属する陳平原、黃子平、錢理群等の若手の研究者たちが「二十世紀中国文学」あるいは「二十世紀中国小説」（以後「二十世紀中国文学（小説）」と表記）という概念を公にしたのである。いまその主張を、陳平原著『二十世紀中国小説史(1897—1916)第一卷』（1989.12北京大学出版社）⁽⁴⁾に付された嚴家炎の「前言」に見てみよう。

中国現代小説は斬新な小説スタイルをもって、「五四」時期に生れた。だが、この変化の根源は戊戌の政変前後に遡ることができる。「小説界革命」のスローガンのもとに生れた「新小説」は、内容、形式ともに西欧小説の影響を受け始めて、多くの新しい要素を生んだ。小説全体については量的変化の中に部分的な質的变化が生れつつあった。「五四」文学革命以降、小説は進歩して審美意識、道德情操、価値觀念などの深層的な面において大きな変化をとげ、現代化に向けての飛躍を実現した。1949年以後の小説は、このような発展変化の中における新たな条件の下での延長である。故に、鴉片戦争以来の中国文学を「近代」「現代」「当代」の三段階に切り離してしまうような史的構造には、明らかに根本的な欠陥がある。第一に、分割の仕方が細かすぎて、視野が狭く偏向していて、研究自体の発展に制限を加えていること。第二に、政治的な事件を文学史区分の境界にすることは、文学自身の実態とは必ずしも一致しないこと（たとえば小説の発展において、鴉片戦争前後における変化は決して顕著なものではなく、ほんとうに小説に重大な影響をもたらしたのは、前世紀末に起った維新思想であって、このことは現在に至るまで誰も近代小説史の分期の依拠すべき点だとはみて

いない) などである。

以上のように、彼らの主張は、いままでの「近代」「現代」「当代」などという歴史学や思想史に追隨した文学史の「分期」ではなく、文学独自の発展や変化に重心を置いている。そしてまた、この考えは「二十世紀中国文学(小説)」という名が示す通り、中国の文学が西欧の文化と激突することで受けた実質的な影響を考慮し、世界文学の中で近代以降の中国文学の発展を総体的に捉えなおそうという試みである。そして、その起点が1897年に置かれたのである。

1897年(光緒二十七年)といえは、政治的には戊戌の政変があったとしてはあるが、文学史的には『国聞報』に嚴復(幾道)、夏曾祐(別士)の「本館附印説部縁起」が発表された年である。つまり、「二十世紀中国文学(小説)」の起点と、「晚清小説」の起点と一致するのである。「近代小説(「二十世紀中国文学(小説)」という主張からは「近代」という言葉は妥当ではないが)は、「晚清小説」から始まるということになる。従来中国文学史上においては「晚清小説」の位置づけは、はなはだ不確定であった。まったく無視するもの、古典文学の終焉期とするもの、近代あるいは現代文学史の始めとするものなどがあるが、中華人民共和国成立以後になると古典文学の終焉期に位置づけるものが多くなるという⁽⁵⁾。

では、「晚清小説」と呼ばれる小説は、実際にはいつから出現するのか、「二十世紀中国文学(小説)」でいう1897年でよいのか。以下、この点について、「晚清小説」に関する唯一専著「小説史」である阿英の『晚清小説史』について検討していきたい⁽⁶⁾。

三

清朝末期に簇生した小説類、所謂晚清小説(あるいは清天小説)についての基礎的研究の先鞭をつけたのは阿英(1900~77)である。その研究成果は、1937年(民国26)5月に上海商務印書館から出版された『晚清小説史』に結実した。所謂、初版『晚清小説史』である。中国最初の「晚清小説」についての専著であり、また断代史として小説のみを専述する中国最初の著作と思われる⁽⁷⁾。それは、阿英自身が独自に収集した豊富な資料が使用されたこと、そしてその資料類を彼独特の視点をもって十四章に分類したことで、前例のない個性的な「小説史」となった⁽⁸⁾。以後、この一書は清朝末期の小説を研究する者にとって、多くの示唆と貴重な資料を提供し続けてきており、この期の小説を研究する者で該書の恩恵を蒙らなかった者は、おそらくいないと言ってもよいであろう。その章目は以下の通りである。

第一章	晚清小説的繁栄	第二章	晚清社会概観(上)
第三章	晚清社会概観(下)	第四章	庚子事变的反映
第五章	反華工禁約運動	第六章	工商業戦争与買弁階級
第七章	立憲運動両面観	第八章	種族革命運動
第九章	婦女解放問題	第十章	反迷信運動

第十一章	官場生活的暴露	第十二章	講史与公案
第十三章	晚清小説之末流	第十四章	翻譯小説

第一章の「晚清小説的繁榮」は、この小説全体の序論となっており、晚清小説隆盛の様々な原因やその特質などが述べられている。

たとえば、「晚清小説の繁榮の原因について」は、1「印刷事業の発達により、いままでのような刻字の困難がなくなり、また新聞事業の発達により、実用の上で多量の生産を必要としたこと」、2「当時の知識人は西洋文化の影響を受け、社会的意義から小説の重要性を認識するようになったこと」、3「清朝政府がたびたび外国の侵略に屈し、政治もまた腐敗を極め、人々はその統治に見切をつけ、ついに小説を書いて攻撃をし、並びに維新と革命を提唱したこと」とし、また、「晚清小説の特徴」としては、1「当時の政治社会の状況を十分に反映し、広範に各方面から社会のあらゆる角度を描き出した」、2「当時の作家は意識的に小説を武器とし、たえず政府およびあらゆる社会の悪現象を攻撃した」との二点を挙げ、さらに「作家の思想傾向」については、「極めて少数の頑迷派以外は、ほとんどの全部の作家が共通点をもっていた。それは男女の学校を設立し、産業を起し、一切の迷信という習俗に反対し、官僚主義および定刻主義に反対する以外には、根本的な救国の道はない」と述べている。

この外にも「晚清小説の形式や内容」や「晚清の小説雑誌」などについても述べているが、この中で特徴的なのは、晚清小説の隆盛の直接の原因を小説専門雑誌の盛行に求めていることであり、そして、その「最も早いもの」として梁啓超が光緒二十八年（1902）に日本の横浜で創刊した『新小説』をあげていることである。このことがなぜ特徴的であるかといえば、阿英は、「晚清小説」の起点を『新小説』の創刊前後と考えていたことではないかと思われるからである。そこで、まず初版『晚清小説史』の中で阿英が言及している作品を1902年以前および1913年（民国元年）後に限って列記してみる。

- 1873 昕夕閑談（翻譯小説）
- 1892 海上花列伝
- 1899 巴黎茶花女遺事（翻譯小説）
海天鴻雪記
- 1900 経国美談（翻譯小説）
涙珠縁
- 1901 黒奴吁天録（翻譯小説）
迦茵小伝（翻譯小説）
- 1913 京華碧血録

以上のような作品が言及されているのであるが、ここに挙げた作品はほとんどが、「書名のみ」かあるいは「版本紹介など、ほんのすこし記述がある」のみである⁽⁹⁾。ただ二春居士（李伯元）の「海天鴻雪記」については、『晚清小説史』「第十三章、晚清小説之末流」に詳しく

紹介されているが、魏紹昌編『李伯元研究資料』（1980.12上海古籍出版社）に収められた『游戯報』の「海天鴻雪記」関係広告二則などによれば、「海天鴻雪記」は、游戯報館が1899年7月から分冊出版しており、おそらく阿英はこの版の存在は知らず（『晚清小説史』には出版時期を記さず、また後述する「晚清小説目」では「光緒甲辰（1904）世界繁華報館刊。四冊」とする）、1904年の世界繁華報館出版の単行本を初出と考えてそのように詳述した、と推測される。しかし、李伯元は晩清期の代表的な作家なので、1902年以前に発表した作品をも含めて「晚清小説」と考えて勿論差し支えないわけでもある。

また、林琴南の「京華碧血録」が「第四章、庚子事变的反映」に引かれるが、この小説は1913年10月1日北京平報社から出版されたもので（原題『劍腥録』全53章で林琴南は筆名の冷紅生を使用）、民国期の作品となる。確かに「民国」は呼称の上では「晚清」ではないが、文学史的にはその余波が当然残っていると考えてよいだろうし、林琴南は民国にも活躍したが名を得たのは晩清であるし、阿英がここに加えたとしても不自然ではない。

さて次に、阿英が初版『晚清小説史』をまとめるにあたって編集した晩清期に発表された作品類（「翻訳之部」と「創作之部」よりなる）のリストである「晚清小説目」（以下「小説目」と、『晚清小説史』の関係についてみてみよう¹⁰⁰）。いま、この「小説目」の中に収録されている作品類の発表年代について、まず調べてみることにする。

まず気がつくことは、「小説目」には勿論1902年以後の作品類は収録されているのだが、1902年『新小説』以前に発行された小説雑誌所収の作品も挙げられていることである。

たとえば「創作之部」に花也憐儂（韓子雲）の「海上花列伝」があげられている。この小説は、清末の上海花柳界を描いた呉語小説としてすこぶる著名な小説で、原作者韓子雲自身が光緒十八年（1892）に創刊した文芸雑誌『海上奇書』に每期三十回まで連載された後、光緒二十年（1894）に加筆して全六十回として単行本化された。つまり、『新小説』の創刊よりも八年も前に出版された作品なのに、それを阿英は「晚清小説目」の中に収録したのである。ところが、阿英は、「晚清小説目」には収録した「海上花列伝」を、初版『晚清小説史』を出版するに当っては、独立した項目も立てず、直接には言及しなかった。このことは、やはりこの作品を「晚清小説」とは認め難かったことを裏付けよう。無論、「海上花列伝」の名は上記に掲げたように『晚清小説史』の中にも登場するが、それは1902年以降に発表された花柳小説や呉語小説との影響関係を説明するために書名のみが言及されるのであって、決して「晚清小説」として扱われているわけではない。つまり、阿英「海上花列伝」など、1902年以前に発表された作品を「晚清小説」の枠外に置き、自らの小説史の区分を明確にしようとしたわけで、『晚清小説史』における「晚清」とは、これは「創作」に限るのだが、ほぼ1902年『新小説』創刊以降を指していると考えてさしつかえなからう。

もっとも、文学史や小説史の中の特定の傾向をある年で史的区分するということには無理が生ずるのは当然で、目に見える潮流が起こるためにはそれまでに何らかの底流や伏流があ

るはずである。したがって、阿英が解放後に出版した『晚清戯曲小説目』の中に1902年以前に発表された小説類をも入れ、また『晚清文芸報刊述略』（1958.3古典文学出版社）の中では、『新小説』創刊以前発行の『瀛寰瑣記』（1872）、『侯鯖新録』（1876）、『海上奇書』などを「晚清」の雑誌として紹介したとしても（さらに「翻訳小説」に1902年以前の小説が含まれていることも）、それは「晚清小説」生成に到る底流や伏流をも取り込むことによって、「晚清小説」の性格をより明確にするための資料を提供したのだと理解したほうがよいだろう。

なお、「晚清小説目」の「創作之部」には「海上花列伝」のほか1902年以前に出版されたものとして、雑誌に掲載されたものではないが、以下のような作品がみえる。

知非子『冤獄縁』	光緒十一年（1885）修竹社石印
無名氏『俠女奇縁』四十回	光緒二十四年（1898）蘇報館刊
古潤野道人『捉拿康梁二逆演義』四十回	光緒二十五年（1899）石印版
天虚我生『涙珠縁』三十三回	光緒二十六年（1900）杭州大観報館刊 ⁽¹¹⁾
曾經涉足人『夢遊上海名妓争風伝』三十二回	光緒二十六年石印出版

これらの作品の中で一書、阿英の初版『晚清小説史』に採られ詳述されたものがある。それは「古潤野道人『捉拿康梁二逆演義』四十回」である。

阿英の初版『晚清小説史』の第七章「立憲運動両面観」の中に「佚名康梁演義」という作品を述べた項目があり、反立憲小説としてほぼ一頁にわたって「佚名康梁演義」について説明が加えられ、この小説についての出版事項について「康梁演義四十回、作者不知為誰、石印本、大概是商賈牟利之作」と記されている。そして、ここに記された回目数および石印本ということと、さらに『晚清戯曲小説目』中に「康梁演義」という書名は見当らないことなどから、「康梁演義」とは、上に掲げた「古潤野道人『捉拿康梁二逆演義』」とほぼ断定できる。ということは、阿英は1902年以前の小説をも初版『晚清小説史』中に採用したことになる。しかし、この小説が初版『晚清小説史』に採られたからといって、それがただちに阿英が1902年以前の作品をも「晚清小説」と考えていたと理解するのは早計で、かえってこの事実こそ、阿英が1902年以降の小説を「晚清小説」と考えていた証左になるのである。

阿英が「康梁演義」を眼にしたことは、初版『晚清小説史』の執筆内容から推測できる。しかし、おそらくは不完本でもあったのだろうか、作者や出版年についてはその当時はわからなかった。ところがその後の調査で上掲のように「光緒二十五年（1899）」の出版であることがわかった。そこで『晚清戯曲小説目』をまとめるに当たっては一応それを収録はしたが、解放後、作家出版社から改訂版『晚清小説史』を出す折には、「佚名康梁演義」の項目はあっさり削ってしまったのである（ただし、「康梁演義」という書名のちは二箇所に見える）。そして、このことは阿英が「晚清小説」をほぼ1902年以降に出現した小説と考えていたとする説を補足できるだろう。

四

以上のように、阿英は「晚清小説」の起点を、ほぼ1902年前後と考えていたと推測できる。実際に、1902年の『新小説』創刊を界に小説雑誌の創刊が相次ぎ、従って発表される作品の数が飛躍的に増加し、作品の内容も『晚清小説史』各章に見られるようにバラエティに富んだものとなり、またジャーナリズムも形成されつつあって出版界の状況が大いに変化し、小説の生成に関わる状況が明らかに1902年以前とは一線を画すようになった⁽¹²⁾。つまり、阿英が『晚清小説史』第一章「晚清小説的繁栄」に述べた状況は、この1902年前後に集中的に起こった現象なのである。

先に述べた「二十世紀中国文学（小説）」は、その起点を1897年においた。1902年とは五年の開きがある。1897年には、作品としてはまだ「晚清小説」の名に値するものはない。しかし、前述したように、目にみえる潮流が起こるためにはそれまでに何らかの底流や伏流があるはずである。その底流や伏流が1897年の「本館附印説部縁起」や1898年の任公（梁啓超）「訳印政治小説序」と解すれば、「二十世紀中国文学（小説）」が1897年を起点にしていることも納得がいく。「晚清小説」もやっと正当に評価し始められようとしている。

注

- (1) 中国で出版された「近代」を冠した文学史について、その執筆開始期をみると、復旦大学中文学系『中国近代文学史稿』（1960.5 中華書局）、陳則光著『中国近代文学史』上冊（1987.3 中山大学出版社）、任訪秋主編『中国近代文学史』（1988.11 河南大学出版社）のいずれもほぼ鴉片戦争以降を「近代」としており、「龔自珍」をその先駆者として冒頭に紹介するが、任訪秋主編のものは、とくに「龔自珍」のために一章をさいている。
- (2) 柯夫・效維「全国首次近代文学学術討論会綜述」（1983.11 広東人民出版社『中国近代文学研究』第一輯収）該文によれば、この討論会は1982年10月14日から20日までにわたって、中国社会科学院文学研究所、河南師範大学、華南師範学院、蘇州大学の共同発起で開催され、出席者は全国より70名、400篇の論文が寄せられたという。
- (3) これらの見解を述べた研究者の名はあげてはいないが、おそらく前者は河南大学の任訪秋、後者は中国社会科学院の馬良春の意見とおもわれる。（馬良春「略談鴉片戦争依頼文学分期的幾個問題」1987.8『中国現代文学研究叢刊』1987—3参照）
- (4) この小説史は全七巻、第一巻は1897年より1916年、第二巻は1917年より1927年、第三巻は1928年より1937年、第四巻は1937年より1949年、第五巻は1949年より1976年、第六巻は1977年より1984年、第七巻は1985年以降。
- (5) 樽本照雄「引かれる清末」（1988.10.1『清末小説から』11）1928
- (6) 阿英が「晚清小説」の起点をいつに置いたかと言うことについては、すでに論じたことがある。（中島利郎「阿英『晚清小説史』の成立」1988.8.1『野草』42）本稿では、再度同様の論を一部重複使用したが前稿の欠を補った。
- (7) 近年になって「晚清小説」に関する専著も何冊か出版された。しかし、阿英の『晚清小説史』に匹敵する

阿英著『晚清小説史』と晚清小説の時期区分

ような小説史はまだない。強いてあげるならば、「中国古典文学基本知識叢書」の一冊として出版された時萌著『晚清小説』（1989. 6 上海古籍出版社）があるが、その基づくところはやはり阿英の『晚清小説史』である。

- (8) 但しこの『晚清小説史』は、たいへん杜撰な部分が多い。この点については拙稿「阿英『晚清小説史』の改訂」（1989.12. 1 『清末小説』12）参照。
- (9) 樽本照雄作成資料「阿英の清末小説観」（1988. 9. 25 中国文芸研究会例会にて配付）を参考にした。
- (10) 編集期間は、1934年頃より1941年前後という。この書目は1954年8月に「晚清戯曲録」とともに冊子化され『晚清戯曲小説目』の題で上海文芸聯合出版社から出版された。1957年には古典文学出版社、1959年には中華書局からそれぞれ再版された。なお、『晚清小説史』と「晚清小説目」の関係については、樽本照雄「目録って何だ」（1978. 7. 15 『大阪経大論集』124）に詳しい。
- (11) 『晚清小説史』「第十三章 晚清小説之末流」中に同名作品が見えるが、これは光緒三十四年の『月月小説』19号から24号に断続掲載された天虚我生の「新淚珠縁」八回の誤り。
- (12) 1902年以降の作品の飛躍的増加については、注(10)に引く樽本「目録って何だ」に詳しい。